

パチンコ依存症者に対する心理支援の一事例

伊藤 美和¹・水内 豊和²

Consultation Support for an Adult with Addiction to Pachinko Using Social Resources: A Case Study

Miwa ITO¹ & Toyokazu MIZUUCHI²

Email: mizuuchi@edu.u-toyama.ac.jp

[摘要]

パチンコ依存症者への社会資源を活用した支援の方法やその有効性を明らかにすることを目的とし、パチンコ依存の状態にあるA氏に対し、自己実現を支える継続的な心理支援を実施した。約10ヶ月にわたる心理支援の結果、社会資源を活用した余暇活動の広がりがみられ、それに比例してA氏のパチンコ店に行く頻度は減少した。また、他者とのやり取りや自己肯定感の高まりが、自身のパチンコ依存の問題解決に向けての意欲向上に繋がったと考えられる。

キーワード: ギャンブル障害, パチンコ依存, 社会資源, 依存症, 自己実現

Keywords: Gambling Disorder, Addiction to Pachinko, Social Resources, Addiction, Self-Realization

I. 問題と目的

生涯経験として、ギャンブル等依存が疑われる者の推計値（潜在数）は約320万人とされている¹⁾。日本において、ギャンブル障害とパチンコ・パチスロが高い割合での関連があると示唆されており²⁾、現代においてパチンコ依存の状態にある人への支援は注目されつつある重要な問題である。平成30年10月5日にはギャンブル等依存症対策基本法が施行された。現在、依存症専門医療機関での治療や民間団体での回復プログラムの提供、ギャンブル等依存症である者等本人の集まりであるギャンブラーズ・アノニマスといった自助グループへの参加という支援がとられることが多く、これらは「問題（依存症）解決」そのものをねらいとしている。ギャンブル等依存症は適切な医療や支援により回復が十分可能であるが、ギャンブル等依存症の専門の医療機関や専門医の不足等から、地域で必要な医療を受けられる体制が十分ではない³⁾。

また、パチンコ・パチスロ遊技障害全国調査⁴⁾によると、遊技経験者は未経験者と比べて、「家族と

過ごす」、「外出（旅行を含む）」等をストレス解消行動としてあまり行っておらず、日常生活においてインフォーマルな社会資源の活用が十分になされていないことが指摘されている。また同調査では、パチンコの現役プレイヤーの中でパチンコによる問題を経験したことがある人の改善方法としてあげられたものの中では、他人への相談が比較的少なく、遊技者とソーシャルサポートとの関係性の希薄さがうかがえる。これらのことから、パチンコ・パチスロ遊技障害を有している者に対して、本人のニーズに合わせた社会資源を活用した支援や問題解決に向けたソーシャルサポートの活用及びその関係性は有効だと考えられるが、実際に活用した支援実践などは報告されていない。

以上のことより、「本人の思いや生活の質の向上」をねらいとした支援を行い、結果的に「問題（依存症）解決」に繋がる支援方針及び実践や産業カウンセラー等が支援者となった事例検討をしていく必要があると考えられる。そこで本論では、パチンコ・パチスロに過度に依存状態であることに悩んでいるA氏に対し、自己実現、すなわち「なりたい自分」を目指した支援を本人のニーズに合わせて行った症例を報告する。そして、社会資源などを活用した支援のあり方やその効果を考察することを目的とする。

¹ 富山大学大学院人間発達科学研究科

² 富山大学学術研究部教育学系

Ⅱ. 方法

1. 対象者

A氏は、20代後半の男性である。支援開始当初、同居家族はおらず、一人暮らしをしていた。A氏は数年前、双極性Ⅱ型障害を発症しており、定期的に医療機関を受診している。20XX-1年5月頃からパチンコに行くようになり、20XX-1年11月頃には多重債務に陥りながらも休日にはパチンコ店に行くような生活をしていた。20XX-1年12月には、精神障害者保健福祉手帳で障害者枠の一般就労で現在の仕事に就職している。さまざまなギャンブラー障害尺度とパチンコ・パチスロ遊技障害の治療経験などに基いて作成された、日本初の国産ギャンブラー障害尺度であるパチンコ・パチスロ遊技障害尺度（Pachinko-Pachislot Playing Disorder Scale：以下PPDSとする）⁵⁾を支援開始前に実施すると、動機因子18、行動因子21、結果因子36であり全因子の合計得点は75（最小値26、最大値111）であった。全ての因子において、一般標準の平均よりも高い結果であり、合計得点もパチンコ・パチスロ遊技障害があるとされるカットオフ値の61⁶⁾よりも高い結果であり、A氏はパチンコ・パチスロ遊技障害の状態であると考えられる。20XX-1年12月に現在の職場に就職し、20XX年1月に生活や職場での悩み等を相談する場として職場の上司から紹介され、公認心理師である第2筆者らがカウンセラーをしている大学心理相談室に来談した。

事前のアセスメントにおいて、A氏の余暇の活動範囲は主にパチンコ店であることやそれ以外の余暇を過ごす場としては実家や麻雀荘であることが明らかになった。A氏にとって、行動範囲がパチンコに偏っていることや、余暇としての行動範囲の狭さとその種類の乏しさが考えられた。また、パチンコに毎日行っていた時期（20XX-1年11月～20XX年1月頃）をA氏にとって「重篤期」ととし、支援開始前の状態として各種検査の結果の記入を求めた。WHOQOL26⁷⁾の結果から、A氏のQOL平均値が2.50と低い結果であり（上限値は5.00）、下位項目においても20代男性の平均値と比べると低いということが分かった。下位項目の値については図4に示す。この結果から、A氏が自身の生活が充実しておらず、満足していない様子がうかがえた。

2. 実施期間と支援方法

実施期間は20XX年1月末から20XX年11月の約10ヵ月間であり、計32回の面談を実施した。支援内容及び方法については、厚生労働省（2020）⁸⁾が定義する「評価的サポート」、「情動的サポート」、「道具的サポート」、「情緒的サポート」というようなソーシャルサポートの分類に照応した内容となるようにした。合わせて、認知行動療法などの「心理的サポート」も必要に応じて行っていた。本研究において、実践した各期におけるサポート内容を表1に示す。A氏の思いや健康状態を大切にしたい心理支援となるよう、どのように進めていくかはA氏の状態に応じて臨機応変に変えていくことにした。

3. 倫理的配慮

本研究の趣旨、個人情報の保護、得られたデータの取り扱いについて書面と口頭にてA氏に対して説明を行い、同意書への署名を得たうえで支援を進めた。また、論文内容について確認してもらい、公表についてもあらためて同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 各期のA氏の姿

（1）第Ⅰ期：A氏が自身のパチンコ依存について相談し、定期的に相談室に通うようになる（20XX年1月末から20XX年3月：心理支援第1回～第10回）

第Ⅰ期ではA氏の実態把握やアセスメントを目的とし、1回およそ30分～90分の不定期の面談を実施した。この期のA氏に対しては、気持ちに寄り添い、共感する関わり方や言葉がけを大切にしながら心理支援を進めた（情緒的サポート）。また、心理支援時にA氏が話した、してみたいことやA氏が行った余暇活動に対して肯定的な反応や評価を行ったりした（評価的サポート）。これらの2つのサポートを通して、A氏自身の性格や問題解決に向けて前向きであることも要因ではあると考えられるが、支援者である筆者はA氏との間に心理支援を進めるうえでの信頼関係を形成することができたと考えられる。第Ⅰ期の終わり頃にはA氏が、自分がしてみたいと思うことを筆者らに話す姿や自身のプライベートな話をしてくれる姿が初期の面談時と比べると増えたように感じた。十分に信頼関係を

表 1 各期の支援内容

	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	第Ⅴ期
評価的サポート	A氏のしたいことの聞き取りとそれに対する肯定的評価	A氏が自発的に行った 余暇活動への肯定的評価、個人内評価への気付きの促し	個人内評価への気付きの促し	A氏の良さやこれまでの中でみられたA氏の素敵な姿を伝える	これまでの支援を通してのA氏の変化等を伝える
情報的サポート	A氏のしたいこと実現に向けた情報提供、地域の余暇サークルの紹介		A氏の興味のある分野に関するイベント等の情報提供	A氏のしたいこと実現に向けた情報提供	
道具的サポート	Googleカレンダーなど携帯アプリの活用		パソコン機器の貸し出し	パソコン機器の貸し出し	パソコン機器の貸し出し
情緒的サポート	A氏のパチンコ依存解決に向けて前向きな気持ちに対する共感		気分の波による落ち込みに対して気持ちの受け止めと共感		
心理的サポート		A氏の損益を考えない突発的な行動に対する認知行動療法	A氏健康状態と実際の行動のずれに対する認知行動療法	自動思考に対する認知行動療法	A氏がしたいことを実現させるために必要なことやものを一緒に整理する

形成できたことで、この後のすべての期において、パチンコ依存に関する悩みだけではなく、日々の不安要因なども筆者らに対して話してくれる姿がみられ、A氏自身の体調が良くない時を除き、すべての定期面談にA氏は来訪した。

(2) 第Ⅱ期：積極的に問題解決に向け、取り組む中でA氏が突発的な行動や過度な自己嫌悪をする姿がある（20XX年4月から20XX年5月：心理支援第11回～第15回）

第Ⅱ期では週に1回、およそ90分の定期面談を実施した。この期のA氏の余暇活動として、他者とともに行うものがいくつか見られた。筆者らは活動の内容に対して評価するだけではなく、活動をしようと考えたことや行動に移そうとしている、もしくは行動したA氏の姿を特に評価するようにし（評価的サポート）、結果だけではなく、その過程を認められるという安心感をA氏が感じられるように留意した。A氏においては、双極性Ⅱ型障害を発症したことが大学院生時代の人間関係によるトラブルに起因していることから、一人でやる余暇活動だけではなく、新たな関係性の中で他者と行う余暇活動に自発的に取り組もうとしていることにおいては大きな変化ではないかと考えられる。また、この期のA氏として、理想（パチンコに1回も行かない自分）に対して強い気持ちをもっているがゆえに月

に数回行ってしまう自分に過度に自己嫌悪する姿が見られた。一方で、筆者らからの過去の自分と今の自分を比較する個人内評価への気付きの促しによって、パチンコに行かなくなってきた自分や様々な余暇活動に取り組んでいる自分というような良い面にも注目できるようになった姿や発言がみられた。

(3) 第Ⅲ期：A氏が精神疾患により体調を崩すことが増え、定期面談に来訪出来なくなることが増える（20XX年6月から20XX年7月：心理支援第16回～第21回）

図1は支援の実施期間におけるA氏の職場への欠勤等の記録である。この期のA氏の職場への出勤状況も6月は午前からの出勤や午後からの出勤を除き、全日出勤したのは週に2～3回程度であった。また、特に6月の予定していた定期面談では計3回の面談のうち2回はA氏から体調が悪く来訪出来ないという連絡があり、6月の前半はA氏との定期面談の実施には至らなかった。このことから、A氏の健康状態に配慮しながら、30分程度の不定期の面談を6月中旬に2回実施した。7月はA氏が不調を訴えることも減ったため、7月は週に1回程度、およそ90分の定期面談を実施した。面談時の内容としては、A氏がパチンコ店に行かなかった日を赤色の「○」、パチンコ店に行った日を青色の「×」で表記した筆者が作成したカレンダー（以下、

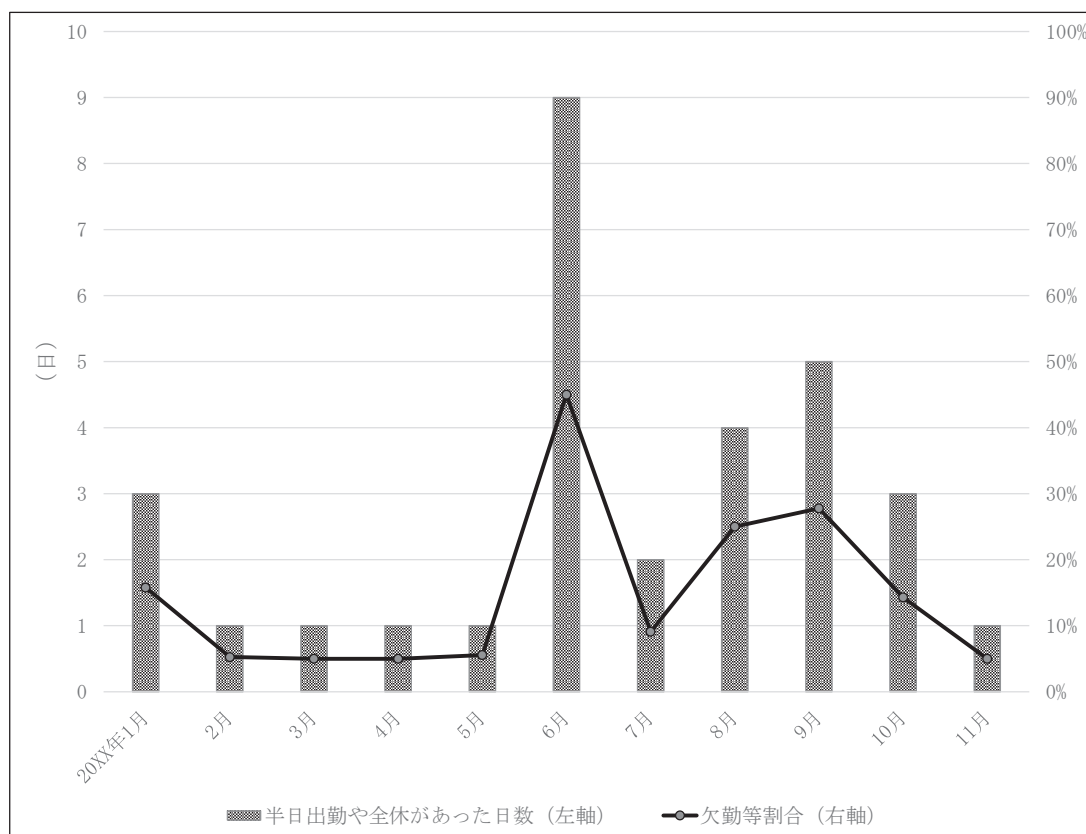


図1 A氏の職場への欠勤等の記録

パチンコ記録カレンダーとする)を用いて、改めて評価される機会を設け、落ち込んでいる気持ちが上向きになるように、支援開始以降のパチンコに関する変化の再評価を行った(評価的サポート)。パチンコ記録カレンダーを見て、嬉しそうに話すA氏の姿が見られ、結果を可視化することが自分の変化に対して肯定的に捉えられることに繋がり、さらに気分の落ち込みや状態に対して客観的にみることができ、A氏にとっては有効であると考えられた。

(4) 第Ⅳ期：A氏が疾病による身体的な体調不良が続き、さらにA氏の思い通りにならないことが続く(20XX年8月から20XX年9月：心理談支援第22回～第24回)

第Ⅳ期では1回およそ90分の不定期の面談を実施した。この期では、A氏のしたいことに対して、どのような手段や方法が考えられるかA氏と共に考えたり、筆者が「(A氏のしたいことに対して)自分ならこういう方法をとる」というようにあるひとつの活動に対して、実現に向けた考えられる手段や方法を増やしていけたりするようにした(情報的サポート)。A氏の「(自分のしたいことをするために)そういう手段もあるんだ」という発言から余

暇活動の選択肢を増やすだけではなく、余暇活動を行うまでの方法の選択肢を増やしていくことも本人の余暇活動の充実を目的とする上で重要だと考えられた。また、間違った自動思考である過度な思い込みを、認知行動療法を用いて減らしていくことが心理支援終了後のA氏の生活において、過ごしやすさやストレス要因の軽減に繋がると考え、自分の思い通りにいかないことが続き、落ち込むA氏に対して、「原因は自分にある」という過度な思考に至らないよう「本当にそうなのか」というような問いかけを行うことにした(心理的サポート)。この期において、過度にA氏自身や周りの環境のせいにする姿はみられず、自分の姿や変化に対して客観的に捉え、さらに結果に対して前向きに捉える姿がみられた。

(5) 第Ⅴ期：A氏が心身ともに状態が安定してきて、A氏と筆者が心理支援の終わりを見据えるようになる(20XX年10月から20XX年11月：心理支援第25回～第32回)

第Ⅴ期では週に1回程度、およそ90分の定期面談を実施した。この期では、自身の精神疾患に起因する損益を考えない突発的な行動をすることも考え

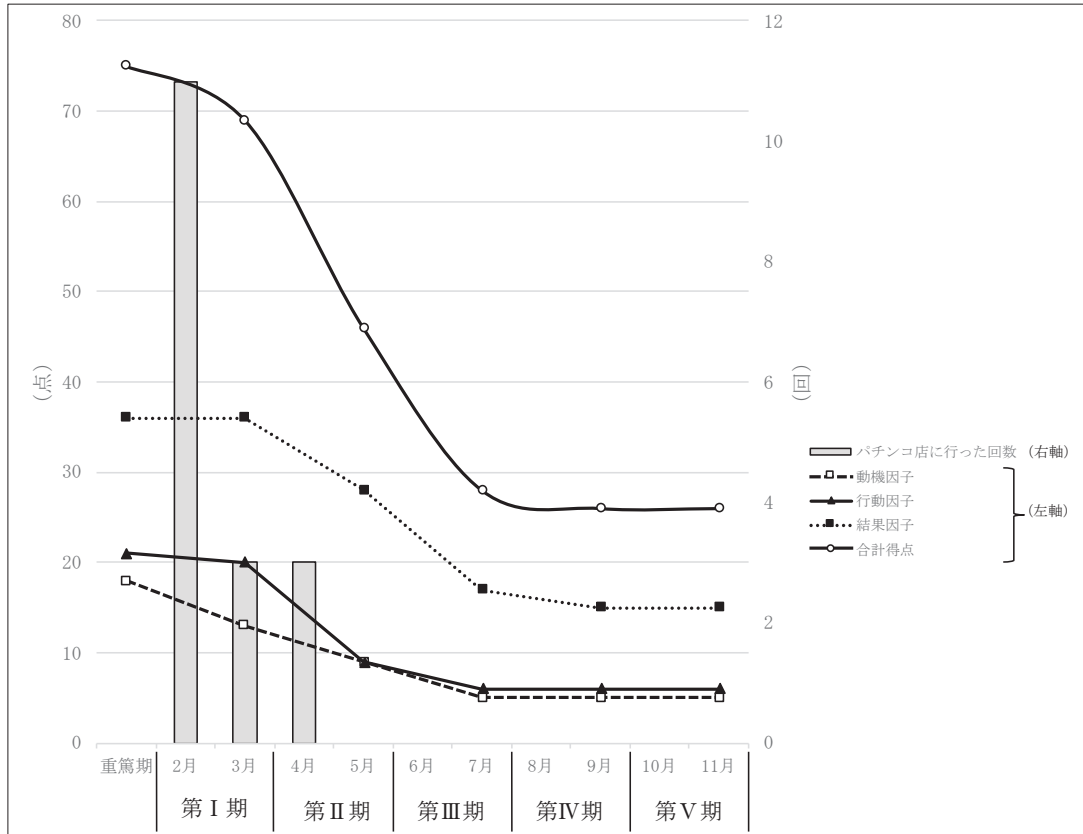


図2 PPDS得点とパチンコ店に行った回数の変化

られる A 氏に対して、心理支援終了後も A 氏がしてみたいことの実現や継続することに向けて、自分で考え、順序立てて行動することが出来るように心理支援を進めた（心理的サポート）。実際に、筆者らとともに計画したことに対して、継続して取り組むことができた。損益を考えない突発的な行動では初めて実践した際に失敗したり、上手くいったとしても継続できなかつたりし、失敗体験となってしまう可能性もあるが、「継続するために」という点に注目して、A 氏と共に方法を考えたことで、今回の A 氏の場合においては「実際にしたいことが出来た自分」ということだけではなく「継続して出来ている自分」の2つの成功体験を経験することができ、自信や自己有用感にも繋げることが出来たと考えられる。

この時点で、A 氏の当初の来談の目的であった「自身のパチンコ依存」に関して、継続して7か月間パチンコ店に行っていない姿がみられ、本人の同意のもと、20XX 年11月で支援を終了することとなった。

2. パチンコ行動及びパチンコに対する意識の変化

支援開始前（20XX-1 年11月～20XX 年1月頃）はほとんど毎日パチンコ店に行っていた A 氏で

あったが、支援開始1ヵ月後には行く頻度が半分以下まで変化した。このことから、A 氏にとって、本研究の筆者たちのようなパチンコ依存に向けて一緒に取り組む自分以外の存在が、パチンコ店に行かない抑制因子になったと考えられる。支援開始3ヵ月後以降から支援終了までの7ヵ月間継続してパチンコ店に行かない姿が見られた。また、A 氏のパチンコに対する意識の変化として PPDS 得点の変化を A 氏のパチンコ店に行った回数の変化と共に図2に示す。PPDS は、本来「ここ12か月の状態」で答えてもらうものだが、A 氏の意識の変化などをより明らかにするために本研究においては、「ここ2週間の状態」で回答を求めた。5月に実施した結果では、合計得点がカットオフ値以下となり、支援開始7か月後（9月）には、すべての因子において最小値となった。

3. 余暇活動の選択肢を表す生活地図の変化

支援開始以降から支援終了後までの A 氏の生活地図を図3に示す。ここでの、生活地図は、A 氏の余暇活動を行う上での選択肢数であるとしているため、すでに行かなくなっているパチンコ店も地図

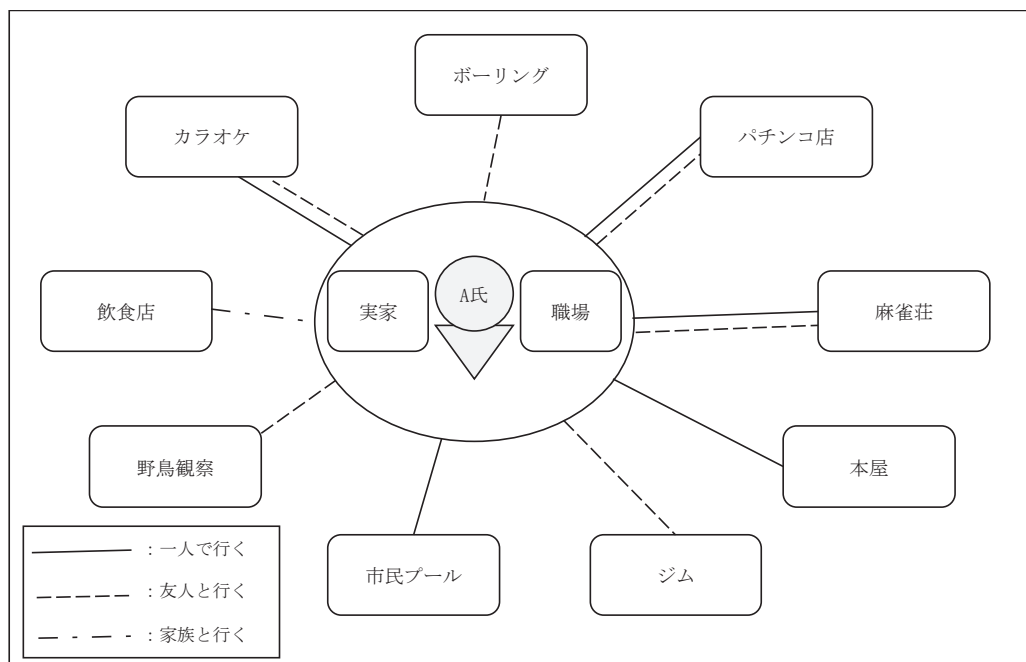


図3 支援終了時におけるA氏の余暇活動の選択肢を表す生活地図

上に存在する。支援終了時点の生活地図を支援開始時のA氏の余暇活動の実態と比べると、「市民プール」や「本屋」等、A氏自身の身近な公共施設や店を利用した余暇活動の広がりがみられた。また、「カラオケ」や「麻雀荘」等の施設を利用して、友人や家族と行う余暇活動の広がりも多くみられるようになった。自分一人で行う余暇活動だけではなく、友人と関わったり、一緒に行う余暇活動の経験を重ねたりすることで、友人の興味・関心のある余暇活動を知り、自身の余暇活動の選択肢の幅が広がったり、余暇活動への意欲に繋がったりしたのではないかと考えられる。

4. 心理面での変化

支援開始前と支援終了時に実施したWHOQOL26の結果をまとめたものを図4に示す。支援終了後の結果において、A氏の平均値が4.54と20代男性の平均よりも高かった。さらにすべての項目において支援開始前の結果より顕著な増加があり、20代男性の平均と比べても全て高い結果となり、A氏が自身の生活に満足していることが分かった。また、各質問項目において、自己肯定感や自己有用感に関する項目で顕著な得点の変化が見られ、A氏からも「今まで自分のことを卑下していた、(今も)自分のこと好きとまではいかないけど自分もやれば出来ると思えるようになってきた」と話しており、心理支援

を通して、パチンコ店にいかないことやA氏自身で余暇活動を広げていくというような様々な自己実現ができたことで、自信の獲得や自分の生活が価値あるものだとして高く評価する姿へと変化したということが考えられる。

IV. 考察

本研究では、パチンコ依存の状態にある成人男性への継続した約10ヶ月間の心理支援を実施した。本実践から、パチンコ依存の状態にある人に対して、社会資源等を活用した支援のあり方やその有効性について以下の2点から考察する。その後、ギャンブル障害のある方へのアプローチとしての本研究の課題について述べる。

1. 余暇活動における社会資源の質的・量的拡充の有効性

パチンコ依存の状態にある人に対して、物的制限や環境的制限を用いた支援ではなく、「パチンコに代わる何か(本研究における余暇活動)」に着目して支援を進めたことで、パチンコ店に行く頻度・回数が減ったという量的な結果や変化だけではなく、行った余暇活動の内容への満足感と結果的にパチンコ店に行かなかったことへの達成感をA氏が得ることに繋がり、本人の生活の質の向上に繋がったと

考えられる。A氏自身も「パチンコをするよりもいい経験ができています」と話しており、無理矢理行動を制限するのではなく、行動問題に代わるものを見つけていくことで本人の生活の質や価値を高めていくことが大切である。また、余暇活動の持続性、実現性をさらに高めるために、対象者の生活圏内の社会資源を活用していくことや余暇活動としての社会資源の選択肢を増やしていくことが大切である。

2. 社会資源のひとつとしての相談相手の有効性

自分一人で問題解決の方法を考えたり、行動を抑制したりするのではなく、身近な他者に相談し、共に解決に取り組むということはパチンコ依存の状態にある人にとって、自己肯定感や自発的な問題解決に向けての意欲やモチベーションの向上といった心理面においても良い影響を与えていると考えられる。また、主観的判断のみであると結果にのみ注目しがちで、過度に自己嫌悪に陥ったり、落ち込んだりすることもあるが、第3者による客観的な評価や肯定的な反応によって、個人内評価や気付きの促しに繋がった。肯定的な関わりや評価を重視した本研究の心理支援において、他者とのやりとりを通して自分が知らなかった他者からの情報の獲得や新たな気付きだけではなく、「出来た」「出来なかった」に関わらず自分を認めてくれる存在への安心感と出来

たことや変化したことに対して評価してくれることへの満足感をA氏が得ることに繋がったと考えられる。

3. ギャンブル障害のある方へのアプローチとしての本研究の課題

本研究では、パチンコ依存の状態にある人に対する心理支援のあり方や社会資源活用の有効性について提言してきた。しかし、本研究の対象者は、自身のパチンコ依存症による問題解決に向けて積極的に取り組もうとしていたため、パチンコ依存症による問題解決に向けて自身も消極的である場合については十分に検討はなされていない。また、本研究の対象者において、家族との関係性や現在の職場での上司と同僚との関係の良好さ、対象者が自家用車を所有していることというような社会資源へのアクセスのしやすさや対象者の性格等も結果に大きく影響を与えていると考えられる。そのため、対象者が問題解決に向け、消極的である場合や生活において社会資源との繋がりにくさがみられる等の場合においては、本研究の結果とは違った心理支援時における問題が生じ、違った視点での支援のあり方について検討することが出来るのではないかと考えられる。

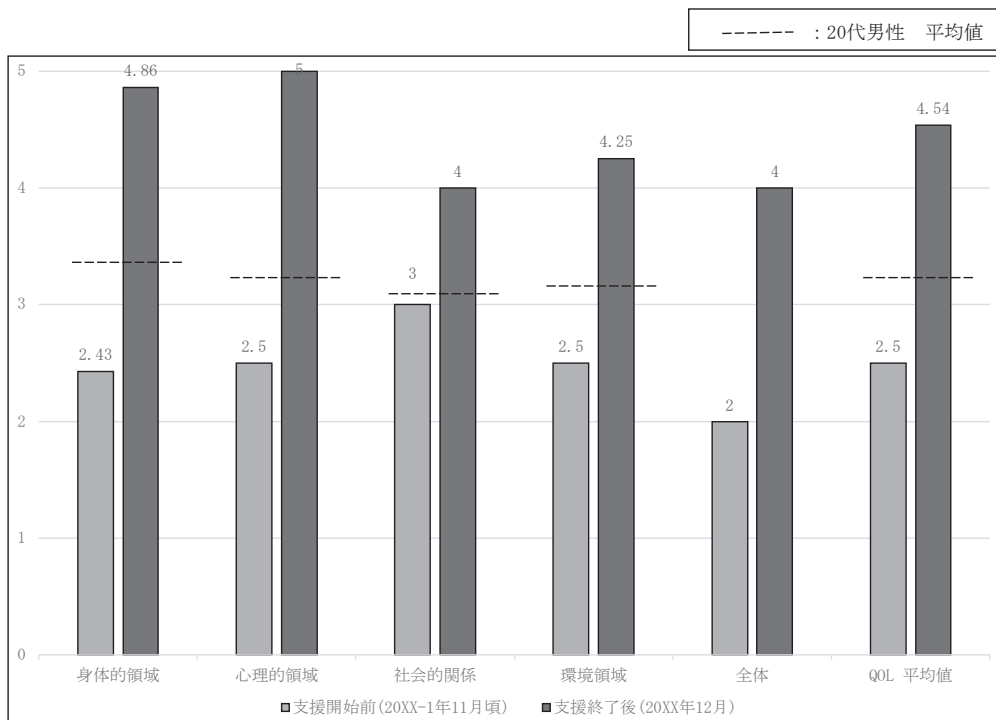


図4 支援開始前後のA氏のWHOQOL26の実施結果

引用文献

- 1) 厚生労働省：ソーシャルサポート，e-ヘルスネット情報提供．<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/exercise/ys-067.html>（参照2020/11/30）
- 2) 秋山久美子，坂元章，祥雲暁代他：パチンコ・パチスロ遊技障害のカットオフ—DSM-5のギャンブル障害の基準を用いた分析—．臨床精神医学 46（4）：463-470，2017
- 3) 消費者庁：ギャンブル等依存症対策推進基本計画．https://www.kantei.go.jp/jp/singi/gambletou_izonsho/pdf/h310419_kakugi.pdf（参照2020/11/30）
- 4) 公益財団法人 日工組社会安全研究財団：パチンコ・パチスロ遊技障害全国調査 調査報告書．http://www.syaanken.or.jp/wp-content/uploads/2018/04/3003_pp01.pdf（参照2020/11/30）
- 5) 秋山久美子，坂元章，祥雲暁代他：パチンコ・パチスロ遊技障害尺度の短縮版の開発．精神医学 58（12）：993-999，2016．
- 6) 秋山久美子，祥雲暁代，坂元章他：パチンコ・パチスロ遊技障害尺度の作成および信頼性・妥当性の検討．精神医学 58（4）：307-316，2016．
- 7) 田崎美弥子，中根允文：WHOQOL26手引改訂版．東京：金子書房，2007．
- 8) 厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 精神・障害保健課 依存症対策推進室：依存症対策について．<https://www.ncasa-japan.jp/pdf/document12.pdf>（参照2020/11/30）

附記

本研究で使用した「パチンコ・パチスロ遊技障害尺度（PPDS）」の本論への掲載にあたっては，株式会社医学書院より転載許諾を得ている。

本報告は，第67回 日本小児保健協会学術集会において発表した。利益相反に関する開示事項はありません。

（2021年10月15日受付）